

書評

Horst Claus Recktenward (hrsg.), *Lebensbilder großer Nationalökonomien, Einführung in die Geschichte der Politischen Ökonomie*, Köln und Berlin, Kiepenheuer & Witsch, 1965. 666 s.

種 瀬 茂

一 本書の構成

本書はニュルンベルグ大学のホルスト・C・レクテンヴァルド教授によって編集された経済学説史である。それは、経済学の歴史上に名を残した人物を生年順に配列し、各々についての研究論文をかかげるといふ論文集の形式をとっている。

このような新しい手法による経済学説史は、スビーゲル教授編『経済思想発展史』*¹(一九五二年)があり、わが国でもよく知られている。この形式のよさは、すぐれた経済学者が、自らの先輩や同僚を語ることに、学説の流れを立体的に構成しうる点にある。学説史上の人物について、多様なしかも心をこめた描写や評価を学ぶことができ、多彩で厚みのある学説史を

作り出すことができ、一人の著者の書き下ろしたものには見られない味わいがある。

* Henry William Spiegel (ed.), *The Development of Economic Thought, Great Economists in Perspective*, N. Y. 1952, xii, 811 p. 邦訳「越村・伊坂監訳」全五分冊、東洋経済新報社刊。

本書では、ケネーからオイケンにいたるまでの代表的経済学者二十八人が対象として取りあげられ、その各々について一人ないし三人の論者による研究が選出されている。本書のような形式の場合、どの人物がたれによって論じられているかは、内容を規定する重要なかぎであるから、煩をいとわずまず本書の構成をかかげよう。カッコ内が選ばれた研究論文の筆者である。

* それぞれの論文の出所をとくに掲げるとよいのであるが、その余地がない。以下本稿では、省略することとした。

F・ケネー (J・エヒト、J・J・スペンクラー、W・レオンティエフ付A・フリッブス)

R・カンティロン (F・A・V・ハイエク、A・ファンファリーニ)

A・スミス (J・レー付W・R・スコット、D・ステュアート、J・ヴァイナー)

A・R・J・テュルゴー (R・P・シェファード付G・シェール、C・J・ジノー付M・C・コンドルセ)

F・ガリアニ (E・ガンツォーニ付F・ニコリニ、L・エイ

- ナウディ、J・ランドマン)
 T・R・マルサス(J・ボナー、W・エンブソン、J・M・ケインズ)
 J・B・セー(Ch・コント他、P・L・レイノー)
 D・リカード(モーゼス(?))リカード付P・スラファ、
 J・R・マカロック、G・J・ステイグラール)
 J・H・V・テューネン(E・サリーン、E・シュナイダー)
 F・リスト(T・ホイス、E・サリーン、J・A・シュンペーター)
 A・A・クルノー(H・L・ムーア、W・G・ヴァフェンシュミット)
 J・S・ミル(自伝付M・バック、A・ペイン、G・J・ステイグラール)
 H・H・ゴッセン(M・E・L・ワルラス、G・H・ブスケ)
 K・マルクス(I・バーリン、J・A・シュンペーター)
 M・E・L・ワルラス(W・ヤフエ、J・R・ヒックス付)
 H・C・レクテンヴァルド)
 G・v・シュモラー(O・ヒンツエ、A・シュビートホフ、E・v・ペッケラート)
 C・メンガー(F・A・v・ハイエク)
 A・マーシャル(J・M・ケインズ、C・W・ギルボー)
 V・バレート(G・H・ブースケ、L・アモロゾ)

- E・v・ペーラム・バヴェルク(C・メンガー)
 J・G・K・ヴィクセル(E・リンダール付T・ゴードルン)
 Th・B・ヴェブレン(W・C・ミッチェル、J・ドーフマン)
 W・ゾンバルト(L・v・ウィーゼ、C・プリנקマン、G・ワイベルト)
 M・ウェーバー(R・ベンディクス、B・B・セリグマン)
 G・カッセル(G・ミュールダール)
 J・A・シュンペーター(G・v・ハーバラー)
 J・M・ケインズ(J・A・シュンペーター、R・F・ハロッド、P・A・サムエルソン)
 W・オイケン(E・ウエルター、W・A・ヨール)

二 経済学説史の意義

右の内容が示すように、対象とする学説史上の著名な人物についても、またそれに関する研究の筆者として選ばれた人々についても、一見してそれとわかる有名なものばかりである。だが、無限ともいふべき研究文献の中から、限られたスペースのなかで、どれを選び出すべきか。これについてこそ、編者の広い学識とさらに相当の見識が問われるところである。ここに、このアンソロジー形式のむずかしさがあろう。

編者レクテンヴァルド教授はこの点について、強く自覚され、選択の基準を定めるために、教授の考える「政治経済学の歴史」の現代的意義についての見解を、本書の序文で示されて

いる。教授がそこで強調されるのは次の三点である。

第一に、経済学の真の理解をもたらすことである。経済学が一般に、たんなる金もうけや生活の手段についての研究であるかのごとくに受け取られていることに対して、より深い人間の思想に関する科学であることを、一般教養人に示す必要がある。

第二、教授は、歴史に対する関心をよび起すことを強く期待している。歴史主義の母国たるドイツで、第一次世界大戦あるいは大恐慌以後、歴史学派経済学は急速に衰退していった。だが「それとともに歴史的思考も死んでしまった」(ベッケラート)のである。経済学の諸理念や諸法則が、その時代と環境から切りはなされて、それ自体で運動する。これではその真価は把握できない。経済学説の展開は、時の流れと人の連なりの中ではじめてその生命をえたものとなる。だから、理論自体の展開過程を追跡するような学説史とは異なったものを目指す必要がある。

* その一例として Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, N. Y., 1963. があげられ。

教授はそこで、独創的な仕事を残した経済学者たちの生涯・人物・仕事を通して、それを次々に連ねてゆくことにより、経済学の歴史的体系化を作り出そうとするのである。各経済学者がそれぞれの個性ある生涯を、独特の時代的環境に生きて、いかなる経済理念と理論を創造したか、それは同時代と後世にいかんにかに評価され、影響を及ぼしたか、これを把えてはじめて、経

済学の理解に到りうる。そこには、各経済学者の中での伝統と創造、過去・現在・未来の間の緊張があり、それが大きな学問展開をもたらすのである。そこで現在の経済学をはじめて正しく理解しうる。

第三に、教授は、経済学の種々の分野、さらにひろく科学の諸分野の総合的把握の必要性を強調される。

思想・歴史・科学の総合という以上三点の強調は、米英経済学の強い影響下にある西独経済学界の現状の中での、深い自覚と強い学問的決意を示して、なみなみならぬものがあり、われわれに一つの反省の資を提示しているのである。

三 学説史上の「英雄」たち

編者レクテンヴァルド教授は、以上の意義を本書に実現するため、一定の体系をもった学派そのものをまとめて研究するのではなく、経済学史上の「英雄」とその生涯・業績を追跡するという方法をとる。それらの人物は生年順に配列してあわせて二八人である。

今それを学派に一応分類してみると、ケネーからミルにいたる古典学派九人、社会主義学派はマルクス一人、歴史学派五人、限界効用学派の先駆者と創始者六人、その後の近代経済学の人七人である。

ちなみにこれをスビーゲル教授の編著と対比してみよう。スビーゲル編著では、古典学派にいたるまでの前史の中に、プラトン、中世経済学説、マーカントイズムをまず含めている。

この点を別として、古典学派までを一括すると一〇人。社会主義および改革派六人、歴史学派および制度学派四人、限界主義の創始者九人、近代経済学者八人となっている。全体のページ数からみてスビーゲル編著の方が大部であり、より多くの人物（古典学派以降で三七人）を含むことができてゐる。しかしそれでも、テュルゴー、リスト、ウェーバーはあげられていない。やはり不十分と指摘されよう。

* スビーゲル編著では、フィジオクラート、リカード派社会主義者、ウェップ夫妻という項目がある。便宜上これらをそれぞれ一人と数えた。

レクテンヴァルド教授によって選ばれた経済学者たちは、いずれも学説史上に名を残すまじしく「英雄」たちであることはまちがいない。だが非常に多くの人物の中から、これだけに限定する作業の中で、当然編者の考え方がにじみ出してくる。その特徴は第一に、オーソドックスで厳密に選んでいる点であろう。スビーゲル編著では、バスティアを加えているにもかかわらずテュルゴーを除いており、テューネンはあげているが、リストはない。これに対して本書は数は少いが巨人ぞろい、ということができる。

特徴の第二をいえば、ドイツ歴史学派から比較的多く（といっても四人だが）、社会主義学派はマルクス一人という点である。スビーゲル編著では、英米人が比較的多く、制度学派としてコモンズ、父クラークがあげられているが、ゾンバルトやウェーバーがない。本書では、ドイツ歴史学派が充実している

のは当然であり、また意義深い。これに対してマルクス一人をもって社会主義学派を代表させている。たとえばスビーゲル教授の選んでいるシスモンディやオーエンは見すごしえないのではなからうか。

四 伝記と学説

次にこの「英雄」たちについて、どのように把握しようとするのであろうか。これについては前述のような教授の基本的姿勢から、伝記的研究が重要な意義を担ってくる。まずかれらの一生の人生遍歴がたどられる。そこには、時代の課題と、それをいかに各「英雄」たちが独創的に解くために苦闘したか、これが明らかにされるような研究文献が選び出される。次に、その経済学説の評価や影響についての研究が選ばれてくる。こうして、「経済学史上の偉人たちの人間像」が作りあげられ、それを順次配列して、経済学の全体が把握されるようにしているのである。

伝記にしても学説評価にしても、それぞれ最もふさわしい一流の人々によってなされており、先輩と後輩、時の流れと人の連りが混然一体をなしていて、興味つきないものがある。

このような編成は前述のようにレクテンヴァルド教授の見識と学識によるものであって、スビーゲル教授の編集の性格と自ら異なるものとなっている。すなわち、スビーゲル編著の場合、やはり経済学説そのものの発達をたどることが主要目標となっているように思われる。その点ではシュンペーターの学説

史に近い性格をもっているといえるであろう。これに対して、本書は「人間像」を画き出すこと、これが主眼におかれているのである。

このような特徴の差を示す点は多々指摘しうるのであるが、その若干をあげて、本書の独特の内容を明らかにしよう。

アダム・スミスについて、スピーゲル編著は、ポール・H・ダグラスの一論文をあげている。これはスミスの価値論・分配論にかんする研究である。これに対して本書は、まずジョン・レーの伝記からの抜粋と、D・ステュアートのスミスの性格についての一節をかかげて、スミスの時代と人間を示している。次にJ・ヴァイナーの論文をあげて、スミス学説の意義を明らかにしめている。

もちろん研究論文としてすでに定評ある場合には、スピーゲル編著と本書とは一致することになるであろう。たとえば、ガリアニについてのエイナウディの論文、C・メンガーについてのハイエクの論文や、シュンペーターについてのハーバラーの論文のごときは、著名である。あるいは、同じ対象たる人物についての研究論文の筆者が、同じ学派の人として、論文の内容上の差がそれほど大きくないこともあろう。たとえばヴィクセルについて、フリッシュとリンダールのごとくである。フリッシュの論稿は、とくにスピーゲル編著のために書かれたもので、その書でも重要な一つであり、理論的分野の追求を主内容としている。これに対してリンダールの論文は、ヴィクセルの『選集』(一九五八年)から採られ、広くヴィクセルの「一生

と業績」にわたっている。

スピーゲル編著と本書との対比は、マルサスについてみると、その差を明らかにしうる。マルサスについては、両書ともボナーとケインズをひいている。スピーゲル編著は、一九三五年ケンブリッジ大学におけるマルサス没百年記念集会でのボナー、フエイ、ケインズ三名の発言であり、マルサスの学説・思想の評価として貴重である。これに対して本書は、同じくボナーの論述でも、マルサスの伝記をあげているのであり、それにつづいて、エンブソンの評価(『エディンバラ評論』一八三七年)とケインズの評価(一九三三年)をあげ、こうしてマルサス全体像を作っているのである。

さらに注目すべきは、最新の学説研究成果に、レクテンヴァルド教授は、慎重に目をくばっていることである。たとえばケナーについて、本書はエヒトおよびベングラの最近の研究(一九五八年)をあげ、バレートについてもブスケ(一九六一年)をひいている。

リカードについては、モーゼスの伝記をかかげたうえ、さらにスラファ版全集により、編者の補注が加えられているのである。

最後に、だが本書の特徴として指摘したように重要なものとして、ゾンバルト、ウェーバー、オイケンについての諸研究を見すぐすわけにはゆかない。それらはいずれも最新の研究成果からとられているのである。

五 補 遺

本書を学説史の本としていきいきとしたものにしていているのは、編者レクテンヴァルド教授の歴史上の人物に対するゆきとどいた配慮である。

その第一は、各経済学者の研究のはじめに、かかげられた若干の短い評価である。寸言よくその人物の個性を示し、本文を補っている。これらの文章を選抜した編者の広く豊かな学識がうかがわれる。望むらくは、その典拠を示しておかれたら、とおしまれる。

第二は、各経済学者の署名と画像*である。これらを多くの中から選び出すには、労苦の多い作業を要することはいうまでもない。いまこれらの署名のさまざまな形と、画像とを、あちこちとひきくらべていると、経済学界の古今の巨人たちの姿がしのばれ、かれらがそろって、われわれの身近にあるもののように思われてくる。編者の配慮のなみなみならぬものを示している。

* カンティロンとゴッセンについては画像は見出されてい
ない。

その他、ケネーの『経済表』、マルクスの手紙(一八六七年八月一六日付、エンゲルスあて。『資本論』第一巻、校正完了をつける有名なもの。本年はちょうどそれから百年になる。)リカード『原理』初版、ゴッセン『人間交通の発展』初版の内

とびら、等々がかかげられ、われわれに深い印象を残す。これらによって、人間の手による経済学という実感を強められるのである。

本書の巻末には、各経済学者の生年・没年および主著を、年表にまとめて、付加されている。これはたしかに便利ではあるが、やはり、編者レクテンヴァルド教授自身の書かれた一つの学説史を知りたいと思う。これ程周到な用意をもって学説史をあまれる教授の思想を、書き下ろされた学説史として読みたいと望むのはむりであろうか。教授は本書の最後の人物にオイケン¹をあげ、またサリン²やハイエク³に親交深く、ほぼ近い思想をもたれるようにうかがえるが、しかし本書では積極的に示されているわけではない。本書の性質上当然のことである。しかし教授による学説史が、短くとも、本書に付加されれば、いちだんと理解は深まるように思われる。

レクテンヴァルド教授が基本的に指摘されるように、高度に技術化され、詳細に専門化されてゆく経済学の現状に対し、特に西独経済学界の反省に立って、思想と歴史と各分野の総合を強調される教授の立場には、強い魅力がある。本書はドイツの経済学研究には独特な本格的学説史を目指す一書として、久し振りに手にしえたので、紹介することとした。これを学んで、経済学の新展開をはたすことは、それぞれの読者の責任であり、その重さが痛感されるのである。

(一九六七・五・二五) (一橋大学教授)